

# デューイの宗教論について

土 平 健 雄

On Dewey's Theory of Religion

by

Takeo Tsuchihira

## は じ め に

デューイは、92年にわたる生涯において、実におびただしい数の著書、論文を公刊している。その分野も、哲学・論理学・倫理学・教育学・社会評論等、実に多方面にわたっている。しかし、彼が若い頃から非常に強い関心を持ち続けていたと伝えられる宗教の問題について論じたものは意外に少ない。まとまったものとしては、小論において考察の対象とする *A Common Faith* (1934) だけである。

デューイに関する研究書や論文においても、彼の宗教論を正面から取り上げているものはあまり多くはないようである。それらの先行研究においては、デューイ独自の宗教観の紹介とその批評がよくなされており、参考になるのであるが、私にはややもの足りない部分もある。デューイの宗教論は宗教論になっていないというような批判もあるが、恐らくデューイにとっては、そんなことはどうでもよかったのだろう。デューイの宗教論のも<sup>1)</sup>と大きな狙いは、コミュニケーションの一形式としての宗教の可能性を追究することにあつたのではないかと私は秘かに考えている。つまり、宗教的なものによる社会変革の可能性を模索することが、1930年代の初期、70歳を越えたデューイの真摯な課題であつたのである。そういう意味で、この書物を宗教論としてではなく、広義の教育論として読むことも可能である。私は小論において、以上のような観点から、先行研究が見過ごしたのではないかとと思われる部分にも光を当て、デューイの真意を読み取る試みをしてみたい。

## 1. 現代人の不幸

デューイは、現代人にとって宗教とは何かということについて、以下のような考察を展開している。

昔は、社会の一員たる個人は、生まれると同時に社会的・政治的組織の一員であると同様に宗教的社会の一員となつた。その人が生まれ、育てられたコミュニティの社会的結合、組織、伝統は、集団の宗教の祭祀、礼拝、信仰の中に象徴化され祀られていた。教育というのは若者をコミュニティの活動へ導き入れることであつたし、そうした活動はその宗教と密接な関係を有し、またその宗教によって認められた習慣、伝統、儀式とあらゆる点で織りなされていた。

デューイの考えるところでは、かつては普遍的であつたが今日ではもはや見られない状況下に生じたこの変化が、歴史上宗教に生じた最大の変化である。これに比べれば、科学と神学との知的闘

争など取るに足りない。この宗教の社会的な重心の移動は、非常に着実に行われ、今やその変化はおおむね完成の域に達したので、この問題は恐らく歴史家以外の多くの人々にとってはその思索から消え失せてしまったであろう。たしかに今日でも、生まれながらにある教会、即ち両親の属する教会の一員で、その教会員たることを当然のこととしている人々はある。しかし、歴史上新しい事実、未だ耳にしたことのない<sup>2)</sup>事実は、教会が世俗化された社会の中にある一個の特殊な機関だということである。

以上のようにデューイは述べているのだが、その意味は彼自身の体験を重ね合わせることでより明瞭になるであろう。デューイが生まれ育ったニューイングランドのバーモント州は、プロテスタントの組合教会の勢力が強く、彼の母親は極めて敬虔な信者であったという。彼女はやや狭い固定観念の持主で、デューイをはじめ子供たちはその下で教会にも行き聖書も読む信仰生活を送っていた。しかし、母からの精神的束縛がやがて重荷となり、宗教意識や情操は人間に生まれながらに備わっているものではないかと考えるようになった。実はこの考えを決定的にしたのは妻のアリス・チップマンであるという。アリスはどの教会の教義も受け入れず、宗教的態度は生来の経験の中に固有のものとしてあると主張していた。<sup>3)</sup>

やがてデューイは、この妻の思想的影響もあって、宗教的態度というものはわれわれの経験のうちに、その経験の質として存在しているのだというユニークな宗教思想を表明することになる。この思想の背後には、われわれ現代人はある意味で不幸なのだというデューイの眩を聞くような思いがする。つまり、われわれはある特定の宗教を選んで信仰するか、さもなくば無神論者になるしかないのである。われわれには二者択一の道しかないのだろうか。第三の道というものは考えられないのだろうか。デューイの宗教思想はこのような葛藤の中から生まれてきたものであると私は信ずる。そうであればこそ、時の流れを超えて生き生きとわれわれの心に訴えかけるものを持っているのである。

## 2. 宗教と宗教的なもの

デューイは『コモン・フェイス』の冒頭<sup>4)</sup>に「歴史上、今日ほど人類が二つの考えをもち、二つの陣営に分かれたことはなかった」と記した。彼はその二つの陣営について次のようにいう。

今日多くの人々は、いやしくも宗教的と呼ばれるものはすべて超自然的なものと無関係であることはできないと信じている。こうした人々には様々な立場の人たちがいるのだが、自然の力を越えた永遠なるものが必要だという一点では完全に一致する。これと対立する一群の人々は、科学の進歩によって超自然的なものの信用はすっかりなくなり、それと同時に超自然的なものへの信仰と関係ある一切の宗教も信用がなくなったと考える。この中の過激な人々は、超自然的なものを除去するとともに、歴史上の諸宗教のみならず宗教的性質を有するものすべてを追放しなければならないと信じている。

デューイは、これら伝統的な超自然主義者と攻撃的な無神論者とに共通するのは、宗教的なものを超自然的なものと同一視する考え方であると指摘する。彼自身は宗教的なものと超自然的なものとを分離すべきだと考えている。彼はこの両者が同一視されるようになった根拠とその結果について、またその理由および価値について論じ、その中で超自然的なものとは独立して存在するものとして宗教を考えている。彼は「人間経験における宗教的営みの性質について全く別の考え方を展開させよう。その考え方とは、超自然的なものからまた超自然的な考え方の周辺に成長しているものから宗教的なものを区別し分離するものである。これらの派生的なものは実は煩わしいよけいな邪魔物であることを示し、そして純粹に宗教的なものがこれらのよけいなものから解放される時に、

真に解放的な展開を行うであろうことを示したい。そうすることによって初めて経験における宗教的側面が自由にそれ自身の本性に従って発展するであろう<sup>5)</sup>と述べている。

宗教的なものを明らかにするために、デューイは更に対比を一步進める。いわく「宗教 (religion) と宗教的なもの (the religious) とは別のもの<sup>6)</sup>である。名詞によって示されるものと形容詞によって示される経験の質とは別のものである。」

では、名詞で示される宗教の定義は何か。彼はオックスフォード辞典中の定義について考察を加えるのであるが、そういうことは無意味であることを結論づける。「というのは、具体的には単数の宗教といったようなものは存在しないことは認めざるを得ないからである。あるものはただ無数の宗教である。……われわれの知っているすべての人々はひとつの宗教をもっているという意味では宗教は普遍的だといえるかもしれない。だが、それらの相違は非常に大きくてお話にならないほどであるから、何か共通の要素を抜き出そうとすればそれは意味のないものになってしまう。」

もう少し明瞭にいうならば、デューイは、「宗教」に「制度ないし信念体系をもつある特殊な実在」という意味を与えている。これに対し「宗教的な」という形容詞には、「目標や理想に対してとられる態度」という意味を与えるのである。

このような定義はもちろんデューイ独自のものであるが、彼はなお自分と近い立場に立つと見られている人々との決定的相違を強調している。つまり、自由主義的な人々の間で近頃ある信仰が真実であることを保証するような宗教的経験について多く語られているが、そしてまたその宗教的経験が宗教の究極の基盤であることさえ主張されているが、このような立場と自分の立場とは違うという。「それ自体が宗教的なある種の経験が存在するという考えを固守する人々は、そういう事実によって、美的・科学的・道徳的・政治的経験や同胞愛や友情とかいった経験とは別な、一種特別な経験をつくり出す。しかし、経験の質としての『宗教的』質は、以上述べたような経験の一切に属するあるものを意味している。それは、独立して存在しうるある形式の経験とは全く正反対のものである<sup>9)</sup>」と彼は述べている。

この議論をもう少し詳しく見てみよう。今日では、~~●~~神の存在についての古い「証拠」では満足しない多くの宗教家がいる。彼らは、科学者がある種の対象の存在を証明するためにある種の経験を頼りとするように、神の存在を証明するためにある種の経験を頼りとしているのである。デューイはこの論議を明瞭にするために、ある文筆家の宗教的経験を引用する。それは、過労から神経衰弱になった人が、ある時神に帰依することを誓ったところ、その人はそれ以来30年間も一瞬の絶望も味わったことがないという内容である。この人の宗教的経験、もっと明瞭に表現すれば神秘的経験であるが、この経験の信憑性をデューイは疑っていない。問題はその解釈にある。彼は、このことについてある別の著述家が、「こうした経験は……科学的に神を認識しうることを意味している」と述べることに對しては反論する。

これを読む人の多くは、キリスト教の神が実験科学の方法で証明できると考えるだろう。だが実際は、証明されたといえる唯一のことは、その人に安らぎをもたらすような「調整作用」が行われたということだけである。それに対して与えられた解釈は、その人に滲み込んだ文化から出たものである。つまり、先の神秘的経験を述べた人は、キリスト教の中で育てられたがゆえに、その調整作用を人格神として解釈したにすぎないのである。

以上のような論議をデューイが行う理由は、生活過程の中で宗教的な力をもっている経験と独立したある種の宗教的(神秘的)経験を峻別するためである。この宗教的な力をもった経験が、特殊な型の信仰や儀式に依存することをやめ、特定の宗教を構成する諸要素から解放されるならば、人生において現在よりも優れたより深い恒久的な調整作用をもたらす諸経験は普通考えられているほど珍しいものでないことを人々は知るだろう。実際、この種の経験は、生活の多くの重要な瞬間

と結びついてしばしば起こっているのである、とデューイはいう。

### 3. 構 想 力

しばらく「宗教的」という言葉から離れ、人生に深い永続的な支えをもたらすものについて考察してみよう。デューイは調整作用 (adjustment) という言葉をよく用いる。その意味するものは何であろうか。彼はまず順応 (accommodation) と適応 (adaptation) とを区別する。すなわち、順応とは、われわれ自身では変えることのできない外的条件に対してわれわれの特定の態度を変えることである。例えば、天候の変化や収入の変化にわれわれ自身を順応させるのである。この態度には二つの特徴があり、ひとつは受動的であること、もうひとつは自我の全体ではなく特定の行動様式に影響することである。もしこれが全般にわたる場合には、諦念とか屈服となる。次に、これより積極的な適応という態度がある。例えば、外国の劇がアメリカ聴衆に受け入れられるように翻案されるとか、世帯の条件の変化に応じて家が改築される、というように使用される。つまり、これはわれわれの欲望や目的に応じられるように外的条件を変えることである。以上の二つの作用はより一般的に adjustment と呼ばれることもある。しかし、デューイのいう「調整作用」の意味は次のようなものである。

われわれの住む世界との関係において、以上の二作用よりも包括的で深く根をおろした変化がわれわれ自身の中に起こることがある。それはわれわれの存在全体に関わる。それゆえわれわれ自身の変容は恒久的なものである。こういう態度には服従の調子が含まれている。しかしそれは外部から課せられたものではなく自発的な服従である。デューイはこういう作用を adjustment と呼んでいる。

更に続けてデューイはいう。「宗教こそ、こういう包括的・永久的な態度の変化を惹き起こすものである、との主張がある。しかしわたしは、この叙述を逆にして、こういう変化が起こる時には常に、明らかに宗教的な態度が生ずるといいたい。そういう態度の変化をもたらすのは特定の宗教ではない。<sup>10)</sup> いかなる原因、いかなる方法にせよ、そういう変化の生ずる時、そこには宗教的な作用がある。」では、宗教的作用とは何か。それは構想力 (imagination) であるとデューイはいう。「その道の最高権威者たちによれば、宗教とは、制約され、束縛されるという意味の語源をもつという。元来それは、誓いを立ててある種の生活様式に縛られることを意味した。宗教的態度とは構想力によってひとつの普遍的態度に縛られたものを意味する。<sup>11)</sup>」

デューイが構想力にこのような意味を与えるに至ったのは、サンタヤナの直観に負うところ大であることを認めなければならない。デューイの引用によれば、サンタヤナは「宗教と詩は本質において同一であって、それが実際問題と結びつく仕方が異なるだけである。詩はそれが人生の内面にはいり込むときに宗教といわれ、宗教はそれが単に人生の表面に浮んでいるにすぎないときには詩以外の何ものでもない」と述べている。デューイは、サンタヤナのいう詩を構想力に置き換える。「構想力は人生の表面に浮んでいることもあるし、その内面に深くはいり込むこともある。<sup>12)</sup>」

デューイのみるところ、構想力と自我の調和力との関係は普通考えられているよりも密接である。われわれの観察や反省は構想力による拡大によって初めて普遍となるのである。普遍とか全体というものは、認識によって捉えることはできず、反省によって理解することもできない。観察も思索も実際の活動も、全体と称される自我の完全なる統一に達することはできない。完全なる自我 (whole self) は理想であり、構想力の産物である。<sup>13)</sup>

宗教の対象は理想である。理想であるがゆえに行為を支配できるのである。ところで、われわれ

を動かす理想は純粋な意味の理想なのか、それともわれわれの現状に対照的であるという意味においてのみ理想なのか、とデューイは問う。それは「神」という言葉に与えられる意味を決定する。一方では、この神という言葉はただある特殊な「存在」を意味するだけであるが、他方では、われわれを願望と行動へ駆り立てるあらゆる理想的目的の統一を意味している。仮に「神」という言葉が、一定の時と場所において人間の意志と感情とを支配するような理想的目的——これらの目的が構想力によって統一を与えられたときに人々が心から身を献げるようになる——を意味すると考えてみよう。そう考えると、「神」とは既に存在するがゆえに非理想的なある種の存在であるといった宗教の教義と比べて、問題の中心は明瞭になるであろう。つまりデューイの<sup>15)</sup>見るところ、ここに宗教と宗教的なものとの相違に関する究極の問題があるのである。

「神」とは構想力が行為の上に浮んだときに本質的に構想力を源として発する理想的価値の統一であるというのがデューイの神の観念であるが、これには言葉の上で誤解を生むおそれがあるので注意すべき点がある。われわれは「構想力 (imagination)」という言葉で空想的なものを指す。しかし、理想的目的の実在性は、行動に際して発揮されるその否定しがたい力によって保証されている。理想が単なる幻想でないことは、構想力がそれを捉えることからして明白である。われわれがあらゆる可能性に達するのは、明確な意味における構想力を通してである。そこで「構想力」という言葉は少なくとも次のような意味をもっている。すなわち、現実には実現されていないものが、われわれの身近に迫ってわれわれを動かすということである。構想力のもたらす統一は、空想的なものではなく<sup>16)</sup>実際の<sup>16)</sup>ものである。

次のように言えば理解されやすいだろうか。スティーヴンソン以前には機関車はなかったし、モールス以前には電信はなかった。しかしそれが存在する条件は、自然的な資材や力や人間の能力の中にあった。存在するものを再調整して新しい対象を発展させるという考えに思い至ったのは構想力であった。新しいヴィジョンは無から生ずるのではなく、構想力をもって古きものを新しい関係の中に見ることから生まれる。

この創造の過程は「実験的」であるという特徴をもつ、とデューイはいう。実現さるべき目的となる新しい価値の意識は、初めは漠然とした不明瞭な形であらわれる。それらの価値は考察が加えられ行動に移されるにつれて、明確な首尾一貫したものとなっていく。目的と現存の条件との相互作用によって理想は改良され、試練を加えられていく。同時に条件も修正を加えられる。理想は現存の条件に適用されるにつれ変化する。この過程は人間生活と共に継続し<sup>17)</sup>前進する。ひとりの人物やひとつの集団が完成したものは、これに続く人々の立脚点となり出発点となる。

「わたしが『神』という名称を与えたいのは、理想と現実との間のこの能動的関係である<sup>18)</sup>」とデューイはいう。これはデューイ独自の神観であり、誤解を招きかねないことは彼自身が一番よく知っている。しかし、このような事実は存在するのであって、これはできるだけ明瞭に力強く述べておく必要がある<sup>18)</sup>ので、あえて大胆な表現をしたわけである。

## お わ り に

デューイは神的なもの、宗教的なものの本質を構想力のうちに見い出した。構想力は超自然的な能力ではなく誰でももっている力である。彼が超自然主義に反対する理由は、それが自然的な人間関係のもつ広さと深さを有効に実現するのを阻むからである。それは、われわれが自己の力のうちにある方法を用いて、これらの人間関係に根本的な変革を生じさせようとするのを妨害するのである。

人間は誰でも、愛情・同情・正義・平等・自由など「善なるもの」への衝動をもっている。た

だ、これらを打って一丸とすればよいのである。階級的利益とか高位にある人々の権力とかの頑強な敵が、こうした統一を実現する障害だとただ主張しているだけでは何にもならない。この闘争を望みのないものとして放棄してしまわない限りは、人々は次の二者択一を迫られている。ひとつは超自然的なものに依存することであり、他のひとつは自然的な力を使用することである。ここに、われわれはデューイの着実な社会改革の理念を発見する。超自然的なものへの依存とはマルクス主義的な革命を暗示しており、自然的な力の使用とは、彼のいう集合主義的改革のことである。「われわれが兄弟であろうがなかろうが、少なくともわれわれは皆同じボート<sup>19)</sup>に乗って波荒き大洋を横切りつつあるのである。この事実のうちに潜む宗教的意義は限りない」とデューイはいう。

今日生存しているわれわれは、遠い過去に連なる人類の一部である。文明の中でわれわれが最も重んじるもの（宗教）はわれわれだけのものではない。それらはわれわれがその中の一つの鎖である永続的な人類社会の所業と苦難とによって存在する。われわれの受け取った価値の遺産を保存し、伝え、修正し、拡大することはわれわれの責任である。そしてわれわれの後に来るものが、われわれよりももっと確実堅固に、広く行渡り一般に参与しうるように、この遺産を受取れるようにしてやらなければならない。ここに一宗派、一階級、一民族に限定されない宗教的信仰のための一切の要素がある。こうした信仰は、常に暗々裡に人類のコモン・フェイスだったのである。ただ、それをもっと明白な、戦闘的なものとする必要が今後残されている。<sup>20)</sup>

デューイは最後の部分で以上のように述べている。1934年という混乱の時期にあつて、社会の改良という観点から彼が宗教にいかに強い関心を寄せていたかがわかるであろう。

## 註

- 1) 私があらかじめ参照した文献は以下のものである。  
 岸本英夫「人間主義の宗教」思想の科学研究会編『デューイ研究』春秋社、1952。  
 山中 徹「宗教論—人間主義の宗教」鯉坂二夫編『デューイ研究』ミネルヴァ書房、1972。  
 高木きよ子「デューイの宗教観」『日本デューイ学会紀要』（以下『紀要』と略記）第4号、1963。  
 King, W. L., 三浦総一郎訳「デューイにおける宗教と宗教的なもの」『紀要』第7号、1966。  
 峰島旭雄「デューイ宗教論における二、三の問題——とくに芸術論と対比して」『紀要』第7号、1966。  
 大久保正健「デューイにおける『宗教的なもの』」『紀要』第20号、1979。  
 高木きよ子「デューイの宗教論をめぐって」『紀要』第21号、1980。  
 山室吉孝「デューイとピューリタニズムのエートス」『紀要』第24号、1983。  
 行安 茂「デューイの宗教論」『紀要』第24号、1983。  
 土屋好重「マリア福音書とデューイの宗教思想」『紀要』第27号、1986。
- 2) Dewey, J., *A Common Faith*, Yale University Press, 1934 (1975), pp. 60—61.
- 3) Dykhuizen, G., *The Life and Mind of John Dewey*, Southern Illinois University Press, 1973, p. 6., p. 54.
- 4) Dewey, *Ibid.*, p. 1.
- 5) *Ibid.*, p. 2.
- 6) *Ibid.*, p. 3.
- 7) *Ibid.*, pp. 7—8.
- 8) *Ibid.*, pp. 10—11.
- 9) *Ibid.*, pp. 11—13.
- 10) *Ibid.*, p. 16.
- 11) *Ibid.*, p. 17.
- 12) *Ibid.*, p. 23.

- 13) Ibid., p. 17.
- 14) Ibid., pp. 18—19.
- 15) Ibid., pp. 41—43.
- 16) Ibid., p. 43.
- 17) Ibid., pp. 49—50.
- 18) Ibid., p. 51.
- 19) Ibid., p. 84.
- 20) Ibid., p. 87.